先人の足跡

大納屋治郎右衛門

外川港記

江畑好治

治郎右衛門の父は、碕山大和源護八世の紀州日高郡東光寺鞍ケ獄長尾城主碕山飛騨入道西宝五代源頼安、童名を助右衛門、長じて飛騨五助と名乗った。当時名島の合戦に功があった。天正十三年（一五八五）源頼安地頭として広村、中野村、名島村、日高村、萩原村、由良村、原谷村等近辺八ケ村の知行を持ち、豪族でもあった。湯川方として碕山一門三十四人と家臣八十騎を率いていた。

所領をはなれて農漁民となり、豪農で碕山一門の居住地は萩原村であった。今も萩原村本郷、東光寺、広川村、名島村、碕山家を名乗る旧家がある。それぞれ源頼安系碕山一門の支流である。現在昭和五十四年（源頼安）の墓は、東光寺村、安楽寺にある。萩原村碕山新一宅である。（本家）

慶長十六年（一六一一）父頼安は、半農半漁を営み、広村の地主地頭であった。治郎右衛門は、この年出生した。幼名を助五郎といい、後に源安久と名乗って人生の出発点とした。本家は、萩原村で父は広村中野に屋形を建て、代々広村の地頭碕山氏として栄えていた。治郎右衛門は広村に住み、半農半漁の毎日であった。現在も広川町名島村に大納屋開墾が残されている。中心に（大納屋）の子孫もいる。名島村碕山正信宅である。

治郎右衛門は寛永十五年（一六三八）二十九歳となり漁業に従事しようと決意し、実現に全力を傾け、下総九十九里まで春に来て秋に帰る鰯漁をしていた。鰯漁をするために、関東下総銚子方面に。広組稼漁舟五百九十一隻にて下見をした。

治郎右衛門は鰯漁をするために、最適な場所を東国の適当な場所や良い地と思われるところは、すでに他

船が入っていた。ただ（三崎）と戸川（外川）には他船が入っていなかった。下総の銚子、外川、三崎、名洗付近を絵図に描き上げて、調べてきた。

明暦元年（一六五五）大納屋治郎右衛門と才能を持った人物の二人は目の前に広がるこの新しい土地で一生一代の漁港づくりの大仕事を成し遂げようとする意欲に燃えていた。長女の養子治右衛門、次女の養子甚右衛門とした。

初代大納屋（碕山）治郎右衛門

外川浦開港

明暦二年（一六五六）六月、戸川（外川）浦築港工事初める。広住大納屋治郎右衛門、源安久、童名助五郎後に教浦と、下総国海上郡外川浦開港の祖先である。紀州広港を出発の時、大納屋を名乗っていた。事業名は、網主で、まかせ網（八手網）で鰯漁をすることが目的であった。一生一代の大事業に乗り出して行くこととなった。船子と共に氏神広八幡宮に詣り、航海の安全と一大事業の成功を祈願した。留守居を覚円寺の院主に御願いした。

第一期工事、松平外記（伊昌）殿からの築港工事の許可も取れた。紀州広村の漁人、大納屋治郎右衛門は、黒潮の鰯漁基地として、外川築港本浦工事を始めた。ときに治郎右衛門四十六歳であった。築港工事方法は、以下の通りである。

材質は極めて硬質の火成岩を使用した。石の採石場所は長崎浦と特殊な場所は日和山の麓から採掘した岩石を用いた。波止場を造るために石が掘り出されたことから（波止山）と呼ばれている。設計は地形に即して、港内三一二五坪、堤防の長さ二七三尺とし、浜に向かって垂直に抱き合う堤防を築き上げることとした。また、海岸に近い所を約九尺位開けて中央の堤防を築き約一丈余りの石橋を架けた。工事は図面通り着々と進行し才能が遺憾なく発揮されていった。工事中は石の運搬方法であった。運搬については、人災が予想され、十分な話し合いが慎重に行われた。結局青竹を敷